

高銳
同澤
二
男禮

上

K110,11
1

B 2

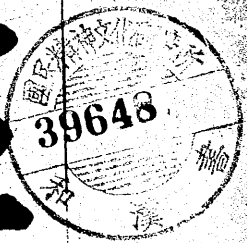
373



高銳一同譯
高良二同譯

男乃禮

塘麓學社藏版



附言

西洋民俗の常として衣服の禮節の儀あり。響應
よ接對の式あり。其他慶賀。吊悔。消息。話言よこし。
各心得べきこととそ多かりける。それば。其儀式の
中よも我が國の習よ適ふ者ハ。固より取りてこ
れ採用ひ。其適ハざるも。尙存して參考の資と
おさんよハ。民間交際の上よ就けて。必だ禮容温
雅よして人の敬愛受ること深らるべし。況し
て今ハ廣く萬國よ交はりて厚く信義を結ぶの
日なるをや。夫ど都人ハ。物見よまからて。善き衣

着飾りせぬ折也。その程のきは、皆きよらよ
らしげなり。鄙びたる人の。祝ひの席ありて飯
おどせりくゆさま。何となく。椎の葉ふ盛り
し手振思ひやられて。見るまはづかしくぞ覺也
。是ふん都鄙の分ちよてさる例しあれば、其餘
の問はゞして知らるべき。誠ニ世界の開けたる
氣運を考ふるま。彼の巴里、倫敦の人文、昌明の都
會をせば。我が國人の見知らざる者一二汲もて
數へ盡ひべうもあらじ。頃日子が弟と共ニ英書
男禮を斯く譯述するまよ。ゆくは女禮をも併

せて全體を具へんと思ふあり。さてこれを見む
人のいざ心はしらぞ。

明治八年春三月

高銳一誌

男禮目錄

上篇七則

衣服 挨拶 紹介 見舞 消息

添書 客問

下篇五則

饗應 舞踏 進物 話音 心得

全篇十二則

男禮上篇

高 銳 一

高 良 二

同 譯

衣服

夫れ始て目づる物ハいと心ニ感ぜるとは深げ
きば久しきを經ても忘きざる者あり。さるよ
りてその人を感じ思むる者ハ必だよき見えを
現ハせとそ肝要なき人ニ逢ふてその衣服を見
きば始てその人の容子を知るよ足る者ゆゑ衣
服ハ人の風儀よりも却りて著じらし。實ニ人と



出て合ひ、或ハ初見の間ニ在りてハ、人唯衣服をのみ見認るとの多けきば、能くこれ品ニ心を用ゆべきあり。

人の思を述ぶる者ハ、語法ニ在りて、人の形を飾る者ハ、服制あり。服制あれば、人の品柄を加へ、とせなければ、品高き人だと賤しまれん。これば心を衣冠ニ用ゆる人、立身せる例し世ニ少からざして、とせを怠れば、富貴、婚姻を求むるは道もろの身においてあかるべし。

人の衣服は、必だろの年齢に應じ、ろの容貌と稱はしむべきあり。されど、此の人に似合ざる衣服のをまゝ、彼の人に似合ふ者もありと見ゆるも、善く衣冠を整ふるの習は、獨りろの時の模様に従ひ、その身の恰好に因る者なれば、爰に一定の服制を設けると甚だ難し。又これ設くと、ろの益あかるべし。さるからに、今唯ろの大段、故人に示して、これに由らしむるのみ、ろの見場、装飾に及んでは、各ろの身の工夫と心懸の善し悪しに在りと見ゆる。天然いか程醜くければとて、憂ふるに及ばざ、似合ひある衣冠、装着せば、大

にこれ取取り繕ふべし。譬へば、頬に黒き斑點ありて、その光烏鰯カササギに均しく、或ハ鼻の色赤くして紅石ベニイシに似たりとも、乃服乃程よき色合をもてこれを飾りなば、人皆その光澤ツヤの異なる取怪しまだ、反りてその目取喜ばしむるとあるべし。それ人ハ皆アドニスアダムの如く生れながらにして美麗ならざといへど、イローツプイロツプに似て醜惡に見ゆるハ、又その身お過ちとやいとん。

目性の弱き人ハ、鼻眼鏡を用ひ、又不具ある所あきば、色取りたる者を懸くへきあり。斯くてその

色ハ、水色からで、天色あるべし。そも、青眼鏡ハ、下品よて藍色の者ハ、殊よ上品なり。

面部の不具なるハ、そべて髪カミの飾り様よて蔽ふよハ、たゞ、染め髪カミをふまよ、その色ハ、口鬚カミと異からざるやうありたし。又髪カミを蒙カミむるよハ、充分大なる者を用ひて、髪毛を殘らざ納め入せ、亂れ毛カミのふきこそよけき。

往來着用の服製ハ、さまで儀式よ拘カガはらねば、各そのよき程よ従ふべし。但餘り派出ハふる羽織カミその外目立カミしき者ハ、そべて用ひせ。

常羽織ハその人の長げを飾るよ用ふる品なれば。餘り低き人あるか。又ハ高きよ過たる人ハ儀式の外。常よこしを用ゆべし。

響應の席。或ハ客間よ出る節ハ。客羽織を用ふるなり。皆ハ近來長きを用ひけるが。反りて半沓よ絹足袋の方を長しとひ。

凡ろ他出して人多き場所。寺院。戯場の内よ在るか。又ハ途中の往來よハ。常よ手袋を着くべきなり。手袋ハ善くろの手よ合ふべくして。聊も垢の染みざる者と限るべし。

舞踏。或ハ。噺會よ赴んじひる時。獨り鏡にて己が姿を寫し見ると幾度と及ぶとも。猶ほ足らざるあり。斯る時よハ。必だ家内の者。或ハ。友同知。み請ふ。好く我身の前後を見せしむべし。余會てこの心得なき人の舞踏。或席よ入り來るを見しが。その衣冠ハ。實よ立派なれど。一方のツギ釣ハ。足元に落ち懸りて。恰も冠の紐の如く垂きてあり。し。思ふよ。その人の鏡も。前を照して。後を照れと能ハざるあり。

衣服の立派といふべきハ。唯その價は高きよあり。

らぞ。又その飾り物の多きよ由らぞ。凡そ飾り物、
玉の指輪、金の鎖など、み費してこそを耀ひ、不
粹の至あや。さきば、正服を用ひて奢らぞ。上へ下
好、釣合をとり、粹よして飾りあふこそ、人
の心を奪ふに足るべし。
心と衣冠よ用ひてその程、失へば、却りてそれ
害あると、猶ほとを怠る者よ均し。さるによ
りて、男子乃衣冠を整ふるよ。善くその中を得
る伊達ならぞ。又野父あらざるを良しとぞ。
衣冠の着振と品定ふは、獨り婦人に止まるの

み。それ婦人ハ専らこれらの事に由て、その身
を保護者あれば、固よりこれに習れて備えりた
りといへど、別よ一種の不思議なる天性を受る
よ似て、それ衣服などの善し悪しを見分たへさ
感能あるとも、男子の及ばざる所あり。さきば、男
子あてて服製を褒むるにも、取るにも足らぞ。婦
人の許しあるに及びて後、自らその全備を信
だべきあり
徒らに衣裳を飾り、利益を望むとも、人の心を
動さぬは足らぞ。とりて、餘り衣冠み心なきは、

恐らくばその不利却りて多かるべし。マヌーへ
イル君曾て弱年の折柄、常ニ麤服を着用せしが、
木夫の爲ニ勾引されしともありき。或る米利堅
人の談話ニ、その人曾て旅館ニ入んじせし時、一
人のいと醜體なる者を見て、その家の召仕さら
んと思ひ、（注）とせよ命じて旅具を運び入せし
めたる後、既に些少の酒代を與へんとせしが、意
ハざりき。とハ一個の貴族某にて、當時米國に比
類なき政事家の一人あるを始て知りありと、
我家に來客ある時、主人ハその衣服を着飾る

なし。とせよ善き習よて缺くべららざれば、
皆此新しき手袋乃清らかかる。手巾乃白き。これ
皆男子に在りて目立者なりとば。人の知れば
となるが、染めし髪の毛の色、接ぎある鼻の高さは、
殊よおろしくぞありける。

挨拶

或るフランスの作者が云ふる如く、人の挨拶ハ
る。或見れば、その育立の高下を知るべし。又世の
中に拜首の數少きより、その身の香落、或招く者
は、獨りアアサロムに止まらざ。

時と處の宜きに隨ひて。挨拶に異同あり。或は恭しく。或は親しく。又嚴格なる。慇懃なる。狎れしきもありと云ふ。さるによりて。或は頭を下げ。或は手扱握り。或は帽子を手を加ふ。或はこれを脱ぎ去らなれば。

帽子を脱ぎ去れば。その時必しを腰扱折るに及ばず。唯僧長などに逢ひて手厚く挨拶する時は。とせと異なり。

途中より婦人に出逢ふ時は。先方より頭を下げ。己を見認るは後。始てとせと語ふべし。若し

己を知らざしと過ぎ去るに會へば。作法として。とせと挨拶を致し禁ぜし。殊に近附する婦人よば。とせと禁ぜし。

位にいと低きか。或は位なき者よ會ひて。その帽子を脱ぎ去るを見せば。己も同じ心得ありたし。

ラ・フォンタイン氏は説く。拜禮は。恰も人其券を持ち來りて。目に富り金銀を催がは如く。人より其挨拶を逢へば。亦己も充分とせと償ふべしと。英王チャールズ二世及びジョージ第四世の各當時はいと尊むべき人なれば。それ下民の殊に賤

しき者よと。常に脱帽の禮を行ひしとぞ。
朋友。或は同輩の者よ。謙遜の過ぎたる拜首を
用ふべからざ。又伊達者の風儀を咎めんとする
時ハ、稍横柄ある挨拶をなほ妨げざる也。そ
の人ハ拜禮を受るに臨めば、唯打ち驚きたる様
をなした。何某君へ。へいといふこともあるべ
し。

町内よてたまふ婦人と行き逢ひ候。とせと物
語あるはやと思へる時、いか程親しき間柄と
引留むべからざ。自から道を枉げて立戻り候

ら。その婦人と連れ行くべし。斯くて、それ町の端
末に至れば、別れ去ることを得る者なり。
こゝまで親ららざる婦人ふ行き逢ふ節ハ、唯拜禮
をなすのみして、とせと言葉交ふることなし。
婦人を挨拶はるの禮ハ、手を帽子よ加ふるをも
て足れりとせせ。全くとせと脱ぎ去るへし。これ
時挨拶を受くべき人と相對せざる手を用ふる
をもて作法とせ。とせば、その身右側を過せば、右
の手にて帽子を脱ぎ、左側あれば、又左の手を用
ふるあり。

人多き場處ありて挨拶する時ハ、他聞を憚かりて、その人の名を聲高し呼ばせ、名を求めたる人間の情ふれど、我名を往來の者よまで知し是んとはる人やはあるべき。

紹介

紹介ハ、常に先づ目下の者を目上なる人へ引合せべし。そも目上目下の分ちハ、唯人の身性を指して云へる者ふれば、上に述べたるは、男子と婦人に引合せ候とばかりといひ、

同化身柄は男子を相互ふ引合はれ節「イ君」「ロ君」



と唱ふるに隨ひて、必だ又「ロ君」「イ君」と呼び、その紹介の禮は、甚だ簡易にして偏らざるべし。男子と婦人に引合せ候時は、先づその許しを受くべきあり。又男子相互の折は、必だしもこの作法を行はせじいへど、はべて人を他人に紹介してその交を結ばしむる時、甲の人とれば望めど乙の人望かけられ、相互にとれば引合はるべからざ。斯る時は、その身乙の人と交深からざる旨を述べ、その紹介を拒むべし。そも人に勧めてその避けんとはる者と交を結ばしむるは、却りて、

紹介の道にあらず。

時の模様ふよれば、人を婦人と引合はるゝ必也
しもその許し受るに及ばず。されば、囃會、或は
舞踏乃席ある時、それ家内室なる者、坐中の
男客、直と女客に引合はるとも妨げずし。この外、
姉はその弟、母は子息を人に引合はるゝこと
もあるべし。されど、その身殊に先方と親からざ
れば、或は、その身柄劣りたるは、然るをことか
るべし。又婦人よきは、直と他乃婦人よ交を結
ばんと望み、その兄弟などよは望まざるあり。

と云ふより、紹介もその家の内室に頼候をも
て、通例の定とす。

朋友と連立立ち、遊歩を歩折柄、己が知りある
者に出逢ひ、或は、その人も共に路連とありし時、
この兩人を相互に引合はるゝこと、大なる心得
違ひあるが、世には、これを犯す者甚だ多し。

朝見舞の客來りて、廣間に會はる時、主人は紹介
の禮を行ふことあり。若しこれを行ひて、坐客相
互に交を結ぶとす。唯席上のことありば、後日と
の交を恃むべからざりて、再び先方より己を見

知るんと求むるの謂きふし。さきどその席ふ止
まる間ハ。未だ見知くざる人たりとも。こきと言
葉を交ふるハ。恰も親友の如くふして。一坐の縁
を取り結ぶべし。
人を見舞ハんが爲め。客間に入るとさるよ。己
の名を知りある者ふけせば。直ちよこきを傳ふ
べし。又家内に見知りある人あせど。たまに廣間
にあつて。是してその外の者の居合をを見せば。自
かゝ進みて紹介すべきあり。さふけせば。その時
は不問なれこと想ふべし。

見舞

見舞の類多し。慶賀吊悔禮式。懇意の別ちあり。
それ作法皆同じからせ。
慶賀にもそれ類多けせば。今一定な作法を爰に
示し難し。但慶賀の節は。それ實に過ぎず。祝儀を
述べたことふかれべし。
吊悔乃見舞ハ。必だ一周日乃間なあれべし。又親
族及び分けず睦じき朋友に限らず。その身見参
すべきあり。その時。餘人よし。見参よ及び。話會
ふとを催はる。その心安からせ。又禮は宜を失ふ

といふべし。されよや。凡そ吊悔は、その身内
おれか。又は親友の者よあらざれば、唯手札を立
關に留め、去れを好しといひ。
禮式乃見舞には、長坐をべからせ、それ身繁多に
て片時も惜むべき折に、こせを行ふべし。こせと
懸意乃見舞は、物毎にべとこせと異ふ。
語言乃體裁は、見舞に類に應じて、その趣を異に
し。こせば、人を吊むらふ節。こせと詩文の事、及語
言と。又禮式に、見舞に赴むれば、その席にて經濟
學問を演ぶることなし。

通例の見舞には、一枚の手札を留め置くべし。こ
せと。家内に嫁しつきたる女。或は未だ嫁しつた
ら。内室の妹あり。この外にも留め客あり。あり
。何れも内室の外に見舞ふべき人の同居せよ。
折は、手札二枚を留め、その一枚は、内室に當り、
一枚は同居の者よ遣はれ。又その家の主人あり。
或は、内室の内一人を知り、若し兩人を
併せ、見舞はんとせば、亦二枚の手札を遣はれ
べし。そも、一枚の札を用ひ、その一と隅を折せ
ば、家内の一人に遣はれ、の意を示し、その兩隅、或

は。片側を折ふ減もて兩人に當るは流仕來では。今亦至りて多くは棄て置たり。人に返すべき者は。見舞と借りし傘ぬり。さきど見舞を返ひ節には。必しもその身見参ひぬに及ばぞ。唯手札を留れば。足きり也。

消息

それ消息の禮として。手紙の終りには。必ぞ恐惶謹言。頓首百拜の如き謙遜な流文句を用ふれ也。唯これは禮數にて。更にその實ありと心得べからぞ。さるにより。その身の高貴な流扱待み

或は。先方の人柄を忌みて。此等の文句を用ふるに憚かれと也。かかれ。

用向の手紙を認むるに。天地色取りたる狀紙を用ふれば。至りて野鄙なり。この時は。常に無地の紙なれべし。月日は。必ぞ初に記し。先方の姓名は。各その好みに従ひ。亦さきを初に認むるも妨げ也。但さきを認む流時は。君が字の上に置くべし。

男子に遣はる手紙は。いと長き紙な紋形なき者を用ひ。ときを封じ袋に入れべし。實に。此等

心得は、まへに肝要な事なり。

さほど親から送る人々は、唯君と云へど、貴君と云は、從前高貴な人へ送る文體は、尊君などな字を用しが、今はとせを行はせ。

招待狀又は、その返書とも、常に封じ袋を用ひ、商用の外、諸向の消息は、今全く封蠟を用ひ、封糊を附く事とせし。男子と遣はる手紙は、赤蠟もつとせを封じ、婦人には、美はしき封蠟もつ香氣を入らざれ者を用ふるか。

男子の間、表立てる消息は、自他相對の文句は

用ひせして、三人稱の體裁に依るべし。懸念ある消息とも、此例を用ふることあり。又相互の不和を生ざるか、或は、間違の起りたる時、その手紙は、如何程長文段たりとも、必だ三人稱採用ふべし。用向の手紙は、人の論說相談に異なることとなく、先づ用事の主意を明白に述べ、後漸くその譯柄、模様に及ぼさべし。とせば、人の願を斷はらんとする時、その由を約やかに手紙の發端に認め置き、殘念の意は、その次に精はしく述べ盡さべし。曾て國會人選の時、ボルク君、ブリストル

の縣廳にて。コーム氏死去の事を談せしが。その體裁猶ほ今日用向の手紙に用ひて法とふはと足れり。その時。實情を初に述べつゝ。諸君我に敢へて今般の選舉を辭はといへる後。その譯稿を委細に論ぜること半時の餘み及べりとぞ。手紙の文句。英文は佛語より較不足ある所あれど。猶ほ尺牘の觀るべき者少からざれば。善く消息の法に達せんと望む人は。こゝに讀みて反復すべきあり。ホルトバイロンの伊太利國より送りし書簡に。恐らくば英語に在りて。いと全備

せる者あらん。固^{カタ}と云ふ常ならぬ心を秀して作りたる者なきと。これを見る時。一筆にて成る者の如し。ホレス。ウールポールの尺牘に。その風雅清麗世に比類なきを覺ゆきとん。又作意の跡を尋ねべし。グレイの文に至りて。いと愛するよ足る者あり。

● 手紙に深く知りたる友に遣ははよこし。慎みしてその量見存意を載せざるやう心得ありたし。この手紙に。焼き捨てがしと請ひて送るとん。未だ先方のことせよ従ふ者あるを見ざるあり。ザ

スリヤリ君の話も。曾て、チャールズ王第一世時代の歴史を調べてありけるが、當時の舊き書簡を多く見出さしよ。その文中を見れば、皆一覽の後、速よ火よ投さべき趣を痛く請ふ者ありしと、そを送りたる手紙ハ、とを他人よ示さるとは、恐おけしはじて。若し紛失して他見よ觸さば、その害亦異からざ。且つ今日親愛すべき朋友の變心せんも計り難し。そも、時日の過ぎ去るとや、一瞬よ出でざとも、朋友の心を變ぜしむる足るべき勢ハ、猶ほ雷雨の乳味を敗るが如く速か

かり。又先方の量見ハ變ぜざとも、その身窠よ心底を變ざるともあざば、その時この變心証候すべき者ハ、獨り自筆の書翰にて、その害亦想ふべしとハ、爰に、ラブル井エ井ル氏の確言。大よ消息の往來に必用ある者あり。この思慮深き人の説に、朋友と交るよハ、他日讐敵と成らん者の如くし。讐敵と居れば、他日朋友と成らん者の如くハ、是れ己を重んずるに非ざ。又人を憐むよハ、非ざ。獨りそれ身を保護の一策ありと云り。

添書

添書ハ、こせを巻き封じ袋に入きて封紙着けど、
そ乃届け方ハ、若シ先方外人ノ身也同輩ナル
バ、手札被添へて己が寓居より送るべシ。その後、
先方ハ來りて見舞をなし心の及ぶべき程、必
深切を盡す者ナリ。若シ、こせ被忘れば、その無禮
なること一かたあらざして、添書を認め、又こせ
と持参する人まで輕んぜらるゝ近シ。

若シ、商人へ遣はべき添書、或ハ、貴人へ送るべき
者なれば、その持参する人、自からその家へ至り
てこれ被届けべシ。是れ一ハ、その繁用を憚かり、

二ハ、その身柄を重んぜればあり、

客間

客間に入る折柄、その場は舞踏、或ハ、嗽會の催し
ある時ハ、必だ先づその家は内室に挨拶をな
して、招待の禮を述べし。こは禮終らざれば、いと
親しき友たりとも、これと言葉を交へず。

これど、若シ、遅刻に及びたれ時ハ、必だしも先づ
内室へ挨拶するに及ばず、この時ハ、手近は居合
せる人に向ひて會釋をなして、漸やくは内室
へ及ぼすことを得べけれど、慎みて無用な話言

を省き速にそを禮を招待主より行ふべし。又坐客の未だ退かざるに先ちてその身立去んとする時ハ何れもそを由を告げざして坐を退き務めて人に見知られぬ様ありたし。

寄合は席より在りてハ客の隨意より交はるを許さざといへど更に尊卑は別ちあることなし。さよみ因りてこの席に入りてハ坐客の尊めとさよ卑しきも皆平等に取扱ふべし。己が好みに任せて相客を嫌ふハ第一その家の内室より對して不敬なれば必だその招待されたる人と一様を取

扱ひて内室の禮意より戻らざるべし。

噺會の招待を受けば約束を違はざるやう心得あるべきあり。若しことを受け後その日に至りて不參の申譯をふひハその家の内室より對して無禮あり殊に雨天の申譯もて約束を違へるといふかゝるべし。そも天氣の惡しき節にハ他客も多くなば不參する者あれば招待主より在りてハ坐客の少き誤評かりてその心より快からざる者なり。雨具馬車の便利あれば雨天の節も見參する人ぞ深切かりといひ。

084.4-2

男禮上篇終

男禮上篇終

十八

同治
二年
男
禮

下

0846

2